



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3197号 2016.8.20 発行

特集ワイド 相模原殺傷事件 感じた嫌悪「いつか起きる…」 長男が障害持つ野田聖子 衆院議員 毎日新聞 2016年8月17日
野田聖子衆院議員=内藤絵美撮影



社会に与えた衝撃はあまりにも大きい。19人の命が奪われた相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」殺傷事件。殺人容疑で逮捕された容疑者の常軌を逸した言い分に、絶句した人も多い。重い障害を持つ長男真輝（まさき）ちゃん（5）を育てながら国政で活動する自民党の野田聖子衆院議員は何を語るのだろう。【構成・吉井理記、写真・内藤絵美】

—植松聖（さとし）容疑者（26）は、事件前の同僚らとの会話や逮捕後の供述で「障害者は安楽死できるようにすべきだ」などと、障害者を大量虐殺したナチスに通じる差別的発言をしていると報じられています。

野田氏 思うことがあり過ぎて、考えをまとめられていませんが……。率直に言うと、通り魔のような無差別殺人と比べて、私は意外性を感じなかった。「いつかこんなことが起きる」って。なぜなら息子を通じて、社会の全てとは言いませんが、相当数の人々が障害者に対するある種の嫌悪を持っていると日々感じてきましたから。

—社会の嫌悪、ですか。

野田氏 息子は、心臓疾患や脳梗塞（こうそく）などで11回もの手術を小さな体で乗り越え、来年からは小学生になります。その息子の治療について、インターネット上にはこんな声もあります。ある人は「野田聖子は国家公務員だ。今、財政赤字で税金を無駄遣いしてはいけない、と言われてる。公務員であるなら、医療費がかかる息子を見殺しにすべきじゃないか」と。これを書いた人は、作家の曾野綾子さんの文章に触発されたようです。

—確かに曾野さんは著書「人間にとって成熟とは何か」で、野田さんについて、＜自分の息子が、こんな高額医療を、国民の負担において受けさせてもらっていることに対する、一抹の申し訳なさ、か、感謝が全くない—＞などと指摘していますが……。

野田氏 私、曾野さんを尊敬していたから、読んだ後に頭が真っ白になって。要は障害があると分かっている子供を産んだ、その医療費は国民が負担する、ならば一生感謝すべきだ、と。私は何を言われても平気ですが、私が死んだ後、一体息子はどうなるのか、と慄然（りつぜん）としました。

健全者と呼ばれる人たちの中には、「障害者の存在は無駄で、国に負荷をかける」と信じている人がいる。この国から障害者がいなくなることはあり得ないし、高齢化やら何やらで、今は誰もが障害者になる可能性があるのに。障害者は「可哀そうな存在」ではなく、将来「なるかもしれない自分を引き受けてくれている存在」だ、ぐらいの気持ちになって

くれたらな。

「命ってすごいんだぞ」

—それにしても私たちが税金や国民健康保険料などを納めるのは、お金を納められない人も含めて「誰もが安心して治療や介護を受ける権利」を守り、享受するための当然の行為です。ある人に感謝されたり、肩身の狭い思いをさせたりする理由はない。日本は、そんな「成熟した民主国家」になっていた、と信じていました。

野田氏 明治時代からなのか、小さい島国で資源もないせいか、日本人は「強さ」への憧れが強い。「強い何々」という言葉が大好きでしょ。これだけ高齢化して人口も減っているのに。コンプレックスの裏返しというか、自分たちが本当は強くないからこそ強くありたい、と。だから、生まれながらに強くあることができない人への「線引き」があるのかも。私も当事者になって初めて気づいた。

—植松容疑者のような考えの人に、野田さんだったらどう語りかけますか？

野田氏 うーん。容疑者だけを悪者にして済ませればいい話ではない。病気に例えれば免疫力が低下した時に菌が入って病気に感染するように、誰もがそうなり得る。自分が幸せじゃない時に、しゅっとそんな思想が入り込んだりして……。でも私が嫌なのは、容疑者が大麻を使っていた、タトゥーを入れていた、病院に入っていた、という話ばかりが注目されること。措置入院のあり方などが議論されていますが、焦点は「手前の段階」と思っています。

—違和感があるわけですね。

野田氏 逆にお聞きしますが、この事件でなぜ被害者の名前が報道されないのでしょうか。被害者が生きてきた何十年という人生が、ないことになっているのでは。その人生を失った悲しみは、これで分かち合えるのでしょうか？

—「遺族が公表を望んでおられない」と警察が説明していることもあります。

野田氏 優生思想的な考えを持つ人たちから、家族が2次被害に遭うからでしょう。変ですよ。だからこそ私は逆を行きたい。息子の障害や写真を公表したのもその思いから。国会議員にも家族の障害を隠す人がいるんじゃないかな。でも隠す必要はない。息子に誇りを持ってほしいとの思いもある。でも、本音を言えば私も息子も、いつ襲われるかわからないジャングルの中を歩いているような気分ですが。

—このジャングル、なくならないのでしょうか。

野田氏 そんなことはない。考えてみてください。セクハラは昔は当たり前のように横行していた。そして女性は泣き寝入り。それが今は「それセクハラ！」って言えるでしょう。男の本音は昔と同じかもしれないけど、建前は変わりました。そこに意味がある。4月に障害を理由にした権利や利益の侵害、差別を禁じる障害者差別解消法が施行されました。これも社会を変えるためによりやく動き出したと感じています。

—政治にはまだまだできることがある、と。

野田氏 そうです。私も嫌いな人はいます。誰も心に毒はある。でも大人になるというのは、心の毒を見せないことだと思う。毒を隠し、建前を大切にできる。それが成熟した大人、国家です。

—野田さんのブログに登場する真輝ちゃん、相当なわんぱくですね。

野田氏 家ではわがままなくせに保育園の女の子にはいいところを見せてたりね。安倍晋三首相のモノマネをするんです。安倍さんが朝、首相官邸に入る時に報道陣に手を上げる仕草をまねるだけですが。詳細は控えますが、石破茂さんのモノマネ、これは相当完成度が高いんです、アッハッハ。

—ぜひ見せてもらいたい。

野田氏 ……容疑者にも知ってほしかった。命ってすごいんだぞって。ちょっと前まで体に17本ものチューブをつながれて生きていた子が、今は2本に減って、安倍さんや石破さんのモノマネして悦に入っているんですから。命の可能性の醍醐味（だいごみ）をもっと知ってほしかったと思っています。

■人物略歴 のだ・せいこ

1960年生まれ。93年衆院選で初当選。郵政相や自民党総務会長などを歴任。2010年に米国で卵子提供を受け、後に結婚する男性と体外受精に挑み、11年に真輝ちゃんを出産した。

わたしの視点 相模原の障害者施設殺傷 共生社会守る対応を 東京大准教授・熊谷晋一郎さん 毎日新聞 2016年8月18日

事件以降、街を歩くのが怖くなった。雑踏を車椅子で移動する時、不意に襲われたりしないかという不安、信頼が揺らいだような感覚に陥る。

犯罪の動機を伝える報道の中に、障害を持つ人は生きる意味がない、という言葉が出てくる。そうではないという価値観を生み出してきた障害者の歴史がある。それが踏みにじられる恐怖心、無力さを感じる。

障害者には一生懸命リハビリをして「健常者」になれば社会で生きてもいいが、なれなければ社会から撤退し、地域から排除される時代があった。そういう中で半世紀かけて粘り強く、社会の側が障害者に歩み寄ってくれるのが正しいという価値観を打ち出してきた。

私は東京大で、障害や困難を抱える本人が仲間と共に自らの問題を研究する「当事者研究」をしており、精神障害、発達障害、薬物の依存症を持つ人らと活動してきた。事件によって私は被害者の側と見られ、精神障害や依存症の人は加害者と同一視する世の中のまなざしにさらされている。

先日、事件の追悼集会を開いた。犠牲者を悼み被害者の回復を願うとともに、立場を超えて積み上げてきたものが間違っていないと共有することが大事だと感じている。集会をきっかけに世界中から届いたメッセージを、ホームページ (<http://touken.org>) 上で公開を始めた。共生社会から離れていかないように、迅速な対応が必要だ。【聞き手・下桐実雅子】

■人物略歴 くまがや・しんいちろう

脳性まひの障害を持つ小児科医

相模原殺傷事件 「直面」した人たちは今 存在の大きさ確かめ合う

毎日新聞 2016年8月18日

そのままでいい。生きていてくれるだけで

相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」の殺傷事件では、無抵抗の19人の命が奪われた。「生きていない」と決めつける植松聖（さとし）容疑者（26）の狂信的な言動は、障害のある人や家族をおののかせた。だが今、その当事者たちが声を上げている。「生きていてくれるだけで……」「掛け替えのない家族」と。日々の暮らしの中で、互いの存在の大きさを確かめ合いながら一。【沢田石洋史、庄司哲也】

事件後、東京都内のある家族を訪ねると、2005年の交通事故で寝たきり状態になった頓所宏修（とんしょひろのぶ）さん（38）が文字を書く訓練を受けていた。介助者の手を借りながら、わずかに動く右手の親指に力を込め、スケッチブックに「なつかしい」と書き込んだ。自分で体を動かすことなどができない「遷延（せんえん）性意識障害」。だが、母の友枝さん（67）によると、目は見えないが光を感じることができ、音も聞き分けられるという。

「植松容疑者は、返事ができない人のことを『生きる価値がない』と供述していると報道されています。私は声を大にして『それは違う』と言いたい。息子は、はた目から見れば何もできませんが、意識と感情を持っているのです」。友枝さんは一つ一つの言葉に力を込めた。

宏修さんが、文字で感情を表現できると分かったのは約1年前。週1回訪れる歯科衛生士に「親指が動くなら、字が書けるのでは」とアドバイスされたのがきっかけだった。最

初は「かき」「うめぼし」などと判別できたが、介助されながらなので、息子の意思か半信半疑だった。しかしある日、宏修さんは「おらんだ」と書いた。インターネットで検索すると、通勤圏内の焼き鳥店にこの名前があり、訪れると常連だったことが分かった。次第に「ありがとう」「おいしい」なども書けるように。長いトンネルを抜けて感情の交流が再開した。宏修さんの文字が残るスケッチブックは50冊を超える。「息子は真剣に生きている。いつか息子の声が聞きたい」。父の敏雄さん（72）は願う。

友枝さんは「家族にとって最後のとりでの施設で最悪の事件が起きてしまった」と嘆く。

命の尊さが軽く扱われてきている現代社会の中で、今回の事件が起きたと受け止めているのが東京都内の男性（66）。17年前の交通事故で娘（38）が一時は死のふちをさまよひ、今でも重度の身体障害と意識障害を抱えている。

男性は「諦めない」「焦らない」「人と比べない」の三つの言葉を自らに言い聞かせてきた。現在はリハビリなどの効果が出て、左手で字を書いたり、電動車椅子を笑顔で操作したりできるまで回復した。男性はこう語った。

「安倍政権は1億総活躍社会を掲げますが、娘が社会でどう活躍できるのかと言われると、分からない。しかし、家族にとっては生きているだけで活躍しているのです。人の命の重さを社会全体で今一度、考えてもいいのではないのでしょうか」

事件を知った入院患者の反応を書き込んだツイッターが話題になっている。東京都内の病院に勤務する女性ソーシャルワーカー（43）が事件の翌日に、「とっと」の名前で次のように投稿した。

<相模原の事件のニュースが流れる夕方の病棟。高齢の女性が『生きてていいの』『ねえ。生きてていいの』と大きな声をあげられた。ふた言目が口にされる瞬間に、2人のスタッフが駆け寄り、ひとりは真っ直（す）ぐ目の前に座って両手を握り、ひとりは肩を抱いて、『生きてて下さい』『生きていて欲しいの』と>

この様子を見守っていた女性は、当時の心境を思い出しながら話す。「私には特殊な人が起こした事件とは感じられない。ネット上での過激な言動、そしてヘイトスピーチや排外的な動きを見ていると、今の社会が抱えている深い闇の部分が噴き出したように思えて…」

女性は同じ日、ホスピスに入院する70代の女性患者が、か細い声で「生きてていいの」と漏らしたのも聞いた。偶然にも繰り返された問い掛け―。とっさにベッドに駆け寄り「生きてていいのよ」と、ぎゅっと患者の手を握った。このやり取りも投稿。これらのツイッターの閲覧数は約25万回に達したという。

女性は言葉を継いだ。「私の小さな声を多くの方が拾ってくださったことに驚いています。同時にこうしたつながりを大切にしたい。弱さを排除しようとする社会は生きにくいのかもかもしれません。でも、人は弱くても、こうして手を取り合っていくことができるのです。事件で感じた社会の息苦しさを克服できないまでも、かすかな希望を見いだしているのも確かだ。

事件の背景には何があるのか。武蔵大社会学部教授の千田（せんだ）有紀さんは「容疑者は本人だけが理解できるようなきてれつなことを言っているわけではありません。実際、ネット上では、容疑者の言動に同調するような意見が飛び交っています。近代社会の病理を体現しているようです」と指摘する。病理を形成するのは、例えば、グローバル化が進み変わりゆく社会に対する不安感のほか、「日本国と世界の為（ため）と思い……」などの植松容疑者の言動やヘイトスピーチに見られる偏狭なナショナリズムと考えている。

もう一つ千田さんが問題とするのが「差別」の変質だ。「以前は『汚い』『気持ち悪い』などと言っていた差別が、今は『無駄』という言葉に置き換わっています。『税金を消費する無駄なやつは許せない』などのように経済的に合理的かどうかで判断されるようになっている」

容疑者の言動に心を揺さぶられたRKB毎日放送東京報道部長、神戸（かんべ）金史さん（49）は、自閉症の長男がいる父としての気持ちをフェイスブックに投稿した。

<私は、思うのです。長男が、もし障害をもっていなければ。あなたはもっと、普通の生活を送っていたかもしれないと>。フェイスブックの文章はこんな書き出しで始まる。家族との17年間の歩みと、長男の「障害」を理解できなかった過去を率直に振り返る。そして<息子よ。そのまま、いい。それで、うちの子。それが、うちの子。あなたが生まれてきてくれてよかった>という言葉で結んだ。

神戸さんは思いを吐露した。「送検時、警察車両に乗った容疑者のあの笑顔が映し出される度に、心の中をやすりで削られているように感じた。障害者に対する憎悪が僕らや子どもたちに向けられている。でも、それに抗して声高に叫んでしまっただけでは、彼と同じ土俵に上がってしまうのではないか。だから、こう問いたい。容疑者に愛する人はいなかったのだろうか。ただ、生きていてくれるだけでいいという存在はなかったのか、と……」

社会的に「弱者」とされる人々が「生きていてもいいですか」と問う社会は間違っていると改めて声を上げよう。そして、心の中から湧き上がる温かくて小さな声を集めれば、差別の芽は摘み取れるはずだ。

わたしの視点 相模原の障害者施設殺傷 障害者よ、街に出よう お笑い芸人「あそどっぐ」阿曾太一さん

毎日新聞 2016年8月17日

脊髄（せきずい）性筋萎縮症による全身まひで、動くのは顔と左手親指だけ。24時間介護を受けながら、「寝たきり芸人」として活動している。

事件はショックだった。発生前夜、介助者とゲームのポケモンGOで盛り上がり、楽しい時間を過ごした。容疑者は元介助者と聞き、僕たちの関係とどこが違う、何が殺意につながったのか、と考え込んだ。障害者の「生」を否定する容疑者の言葉には恐怖を感じた。インターネット上に同調する人も現れ、間近に迫ったお笑いライブの舞台に立つのが怖くなった。

容疑者がなぜ、このような考えを持つようになったのかなど、まだ分からないことが多いが、一つ言えるのは、障害者を身近に感じられていないことが、同調者を生むといった事態を招いているのではないだろうか。

被害に遭った施設では、大勢の障害者が共同生活をしていた。それぞれの事情もあると思うが、障害者が地域で暮らせない社会の壁がある。壁を前に、障害者や家族が社会に遠慮してしまう面もある。

事件はあったが、障害者は胸を張って街に出よう。社会参加しよう。仕事でも、映画鑑賞でも、買い物でもいい。僕はお笑いで社会参加する。障害もネタにする。一つ紹介しよう。「初めて寝返りを打ったおいつ子を見て、『おじを超えたな』と思う」

同情なしで、ただ笑ってもらいたい。【聞き手・望月麻紀】＝随時掲載

■人物略歴 あそ・たいちさん

佐賀県出身。熊本県合志市内で1人暮らし。37歳。

わたしの視点 相模原の障害者施設殺傷 元職員の凶行、なぜ 社会福祉法人「北摂杉の子会」理事長・松上利男さん

毎日新聞 2016年8月14日

2年前に起きた、川崎市の老人ホームで男性職員が入所中の高齢者をベランダから投げ落としたとされる事件と同様、今回の事件も元職員とはいえ「内部の犯行」だった。だからこそ防ぐ手立てがあったはずだと思う。

障害者施設を運営する者は、障害者への虐待防止に心を砕く。職員の採用から育成の方法、悩みの相談や解消策の立案など取り組むべき課題は幅広く、スーパーバイザーの導入など「外部の目」を入れることも重要だ。



私の経験から言えば、職員らによる虐待など利用者支援がうまくいかない背景には、入所者との関係だけではなく、上司や同僚との関係、家庭や私生活の問題も絡んでいる。そうしたリスクをいかに把握し、早期に摘み取るかが問われる。

「津久井やまゆり園」で働き始めたころから虐待行為をしていたとされる容疑者に対して、施設を運営する「かながわ共同会」がどんな対応をし、行政とどのような手立てを講じていたかが知りたい。容疑者が同園職員となった2012年に施行された障害者虐待防止法は、障害者への身体的、心理的、性的虐待や放置などを見つけた者は行政機関に通報するよう義務付けている。

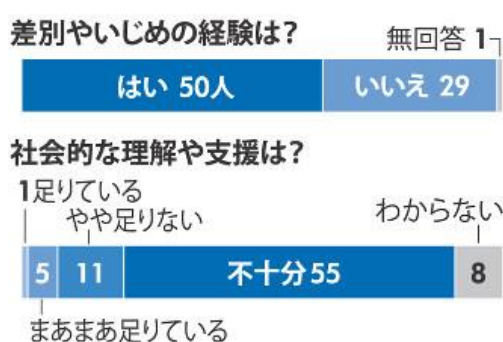
凶行の動機は職員時代にさかのぼる。容疑者の異常性を強調するだけでは、問題の構造が見えなくなる。二度と起こしてはならない事件だからこそ、徹底した検証が求められる。

【聞き手・栗田慎一】＝随時掲載

■人物略歴 まつがみ・としお

障害者への虐待防止と高度障害者支援に取り組む。

吃音 「差別を受けた」6割 「理解不十分」7割 毎日新聞 2016年8月16日



本紙アンケート

言葉が出にくい吃音（きつおん）を抱える人々を対象に毎日新聞が当事者団体などの協力で全国アンケートを行ったところ、6割強が「学校や職場でいじめや差別を受けた」と回答した。「吃音への社会的理解や支援が不十分」との回答は7割近くに達し、吃音への無理解や社会的支援の欠如が浮き彫りになった。症状を抱える人は100人に1人程度とされるが、当事者団体によると吃音によるいじめや差別の実態を明らかにする調査は過去に例がない。

調査は過去に例がない。

アンケートは今年2～6月、各地の自助グループを束ねるNPO法人「全国言友会連絡協議会」（全言連、東京都豊島区）や、名古屋市のNPO法人「吃音とともに就労を支援する会」（どーもわーく）などの協力で実施。20～80代の80人から回答を得た。

「吃音が原因で学校や職場でいじめや差別など不利益な扱いを受けた経験はあるか」との問いに、50人が「はい」と回答。「吃音への社会的理解や支援は足りていると思うか」には、55人が「不十分」とした。

理解などが「不十分」な理由について、「正しい知識を持つ人が周りに少ない。『あがり症』や『よくかむ人』くらいの認識にとどまっている」「法的支援を受けられるはずなのに、福祉・医療の現場で（吃音が）ほとんど知られていない」などの意見があった。

また、「現在の就労は吃音者に不平等。（面接などで）配慮が必要だ」「中学や高校に『ことばの教室』のような通級指導（障害の状態に応じた特別な指導）の場がほしい」「保健体育の教科書に吃音を載せるべきだ」との声があった。吃音に対する社会的偏見を踏まえ「できれば誰にも知られたくない。隠し通したい」と望む人もいた。

一方、「吃音の症状を改善・克服したいと考えているか」との問いには、67人が「はい」と回答。12人が「個性と考えている」などを理由に「いいえ」と答えた。

集計を踏まえ、全言連の南孝輔理事長は「社会で不利益を被る吃音者は潜在的にはもっと多いと感じている」と指摘。「障害者の不当な差別的扱いを禁止する障害者差別解消法が今年、施行された。身近な障害である吃音のことを人々にもっと知ってほしい」と訴えている。【遠藤大志】

吃音 一般的に「どもり」と言われる発語障害。典型的な症状は「た、た、た、たまご」などと単語の一部を繰り返す▽「たーまご」などと一部を長く伸ばす▽「……ったまご」

と出始めで詰まる一など。吃音者の多くが「話すとまたもってしまうのではないか」という予期不安を抱え、症状を隠そうとしたり、コミュニケーション自体を避けたりする傾向がある。三島由紀夫の小説「金閣寺」や、吃音に苦しんだ英国王ジョージ6世の史実に基づく映画「英国王のスピーチ」など文学や映画のテーマになった。

「病気や障害は個性」 難病の中3、山田倫太郎さんがエール

中日新聞 2016年8月19日

「たくさんの人を元気づけたい」とエッセーを出版した山田倫太郎さん＝
長野県箕輪町で

長野県箕輪町の難病の中学3年生、山田倫太郎さん（14）が、闘病体験や日々の思いをまとめた2冊目の著書「命の尊さについてぼくが思うこと」（角川書店）を出版した。さまざまなハンディキャップを個性と受け止め、多くの人を元気づけようと執筆した。「自分を大切にしてください。他の人も大切にすることが出来ます」というメッセージを込めて。



◆「命の尊さについてぼくが思うこと」2冊目著書出版

山田さんは、心臓の右心室と左心室の壁がない単心室症のため、仮死状態で生まれた。血の流れが悪く、全身にさまざまな影響が及ぶ。生後半年で三度の手術を受け、命の危機を乗り越えた。現在も酸素吸入器のチューブを付け、チアノーゼ、肝硬変なども抱える。左手も不自由だ。

著書では、十四年間を時系列で紹介している。第一章は、乳児期の医療体験を、母のこづえさん（42）や主治医から克明に聞き取り、まとめた。「手術や病気について正しい知識を持つことは、子どもでも大事なこと」「手術でできた傷は金メダル」といった言葉が並ぶ。

第二、三章は、保育園時代の思い出。三歳になって、口から食べられるようになった。五歳のとき十三時間に及ぶ手術を受けて心臓の機能が改善され、走れるようになった。しかし、タンパク質が血中に吸収されにくくなる胃腸症を発症し、その後も入退院を繰り返していく。その中で学んだのは「病気や障害があっても、説明すればみんな理解して協力してくれる」ことだった。

小学校時代には、本著の半分を割いた。二年のころ、歴史に興味を持ち、夢中で本を読むようになった。三年生になって、弟の恵次郎君が誕生し、兄の自覚が芽生えた。五年生のときにはクラス内でいじめを受けたことがあり、勇気を出してこづえさんに相談し、解決した。その体験から世界各国の差別の問題を調べ、差別と闘うヒーローを恵次郎君のための絵本にしたりした。

山田さんにとって七月二十六日に相模原市の障害者施設で起きた殺傷事件はとてもショックだったという。「障害があるから、生きていく価値はないという考え方は許せない。強い怒りを感じました。一生忘れない」と語る。

中学生になって、新聞やテレビでたびたび紹介されるようになった。昨年秋に出版した最初の著書「医者をめざす君へ」（東洋経済新報社・九百七十二円）は、「お兄ちゃんの病気を治すために医者になりたい」という恵次郎君のために、患者にとっての理想の医師像をまとめた。

家族旅行、趣味の料理、妖怪への関心、淡い初恋など、楽しい話題もいっぱい。「悲しいことがあったら、この本を読んでほしい。ぼくのお気楽さを知って気持ちが軽くなると思います」と笑顔を見せた。今は、時代小説に挑戦中だ。

「命の尊さについてぼくが思うこと」は四六判、百九十二ページ。千五百十二円。

（編集委員・安藤明夫）

3歳児、38度で30分以内に熱中症リスク 月舘彩子 朝日新聞 2016年8月18日

3歳児が気温38度の晴れた日にアスファルトの道路を歩くと、29分で熱中症の危険性がある。こんな結果が、名古屋工業大と東北大などの研究チームのスーパーコンピューターを使ったシミュレーションで明らかになった。

チームは、気温やアスファルトからの照り返しの熱の測定値をもとに、気象条件や身長などに応じて熱中症リスクを割り出すプログラムを開発。スパコンを使って皮膚や臓器、筋肉など52種類の組織の温度上昇を推計し、体温、発汗量がどう推移するかをシミュレーションした。

その結果、3歳児（身長100センチ、体重13キロ）が、気温38度の時に道路を散歩すると、体温は29分後に1度上昇。発汗も続き、熱中症の危険性が高まる。46分で体重の2%の水分を失う初期の脱水症状になった。気温が36度の場合は37分で、34度でも50分後には体温が1度上がった。

社説：熱中症 幼児と高齢者に目配りを 信濃毎日新聞 2016年8月19日

暑さが続く中、県内で熱中症の人が救急搬送されたとの記事が毎日のように新聞に載る。熱中症は症状が重くなると死亡することもある。幼児と高齢者は特に注意が必要だ。周りが目を注いで夏を乗り切りたい。

温度や湿度が高い中で、体内の水分やミネラルのバランスが崩れて体温をうまく調節できなくなるのが熱中症である。めまい、体のだるさ、けいれん、意識障害といった症状を起こす。

自分で水が飲めない、脱力感や倦怠（けんたい）感が強い、動けない。こういった症状が出たときはためらわずに救急車を呼んでほしいと消防庁は呼び掛けている。

同庁のまとめによると、8月8～14日の1週間に全国で5554人が熱中症で搬送された。そのうち136人は3週間以上の入院を必要とする重症だった。

前の週の1～7日には全国で12人が死亡した。長野県では7月下旬に塩尻市で搬送された人が亡くなっている。こうした実情を見ると、熱中症を高温による気象災害と呼びたくもなる。

気象庁の予報では、長野県を含む関東甲信地方は向こう1カ月間気温が高い傾向が続く。引き続き警戒が怠れない。

救急搬送された人のうち、65歳以上が約半数を占める。

高齢者は暑さや喉の渇きを感じにくい。汗をかきにくくもなる。自覚がないまま熱中症になる危険が大きい。エアコンを使うことをためらいがちで、屋内で体調を崩すケースも少なくない。家族に高齢者がいる場合は丁寧な目配りが欠かせない。

幼児は高齢者以上に暑さの影響を受けやすい。体が未熟で体温調節機能が弱いからだ。

3歳児が気温38度で歩道を散歩すると30分で熱中症になる一。名古屋工業大などの研究チームがまとめたシミュレーション結果である。地面からの照り返しで高温にさらされるリスクが大きいことを忘れないようにしたい。

〈家の作りやうは、夏をむねとすべし。冬はいかなる所にも住まる。暑き比（ころ）、わるき住居（すまい）は堪へがたき事なり。〉

兼好法師が「徒然草」に書いている。衛生状態や栄養状態が悪くなかった鎌倉時代のことだ。夏を越す大変さがしのばれる。

21世紀の今でも暑さが体に負担になることに変わりはない。命に関わることと心得て、エアコンを使う、十分な水分、塩分とバランス良い食事によって体調を整える、といった対策を心掛けよう。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

